君

小峰三千

-男君

作 作 Ж 詇

雪<sup>ゅき</sup>解げ 浅緑とり 生ののな 0 の なる若草の 野の 争 子闘 敗ぶ 辺に萠え出でし ĥ じと

我等が胸に溢るなり 若き力のよろこびは 伸展ゆく生命思ふときのび

雄ラこん

の 気き

はあふれつつ

肥の馬ば

原頭

に

嘶きて

崇き理想を胸にして たか りそう むね

生くる喜悦謳ふ哉

四

寂賞 曠野 眺が め く 暮 パに凋落 はてなき石 る手稲山 の秋更け 狩り 0

Ć

る

今は小暗

き木

(下閣

声を聞きつつ逍遙

へば

黒百合咲けど春

Ü づ 悲哀誘、

ふ郭公の

今う の跡と ) ぞ 馳 すれ の夕まぐれ する北欧州 ゆ ゆく赤陽に

**盧生の夢となすなか** うつろひやすき若き日を

れ

仰ぉ 場ば げ がば 高たか のに虫むし ゴの音は L 秋の空 日も淡れ

音も淋漓 寒月高く 大雪原は 哀愁をこ 瞑想ぞ如何に深からん 吹ふ 小く 風膚 に に消ゆるとき しく行く橇 む 冴ゆる夜半 る若人の しみ 0

自然の教訓学びつつしぜん をしくまな いいれ 州の春 秋にいまない かんしゅう しゅんじゅう 先人建て 精神を磨い 尚き生命に生きなんと き歴史伝へかし し自治寮の く友どちよ